

7 インドネシア(その一)

ジャカルタの「マラム・ミング」

松井和久

「マラム・ミング」とはサタデー・ナイトのこと。週休二日制がまだ一般的でないインドネシアの人々にとって、一週間を終えて解放的な気分の味わえるマラム・ミングは待ち遠しいものなのだ。もつとも、マラム・ミングには家の外で友人や恋人たちと過ごすのが当然とみなされているから、ジャカルタの若者がマラム・ミングに一人で家になどいたら、周りから哀れみの視線を浴びてしまう。それでも、ジャカルタの若者のマラム・ミングの遊び方は、予想以上にワンパターンのように感じる。お定まりは、テレビ、映画、ドライブだ。以下は、わが下宿の大家一家の、あるマラム・ミングの光景である。

レノン・ルンピ

土曜の夜七時半、それまで中継されていた堅苦しい国営テレビのニュースが終わると、家族全員お待ちかねの「レノン・ルンピ」が民間放送RCT

Iで始まる。ジャカルタ土着の伝統的な喜劇のひとつである「レノン」を現代風にアレンジしたこの番組は、伝統的なブタウイ語（ジャカルタの地方語）やプロックエム語（若者などが使うジャカルタのスラング）をふんだんに用い、日常生活に即した題材をダジャレやギャグで笑わせる。これを見ていないと友だちから仲間外れにされかねないほどの人気番組である。

一九八九年に始まったインドネシア初の民間テレビ放送であるRCTIの番組は、ほとんどが米国製の映画やテレビ番組（インドネシア語字幕付き）であり、「レノン・ルンピ」は数少ない自社製作番組である（ニュースは国营テレビTVRIのものを放送）。RCTIの放送は、創立四周年を迎えた九三年八月に一部地域を除きほぼ全国放送となったが、放送エリアがジャカルタ周辺に限られていたそれ以前でも、パラボラ・アンテナを使って遠くスマトラ島などでも視聴されていた。ジャカルタの若者に人気のRCTIに比べ、国营のTVRIは国軍提供の歌謡番組や「農村開発の時間」などの堅苦しい番組を並べているせいか、今ひとつ人気がパツとしない。そのTVRIも、RCTIに刺激されて最近では洋画やバラエティーに力を入れはじめてきた。

テレビは何といっても最大の娯楽である。どこの家でもたいていテレビは一日中つけっ放しで、誰かしら視ている。この光景は電気の入った農村でも同様だ。特にRCTIは平日は正午、土・日は朝から始まり深夜三時すぎまで、国際サッカーの衛星中継があるときは翌朝まで放映

される。人口のほとんどを占めるイスラム教徒には明け方の礼拝があるから、テレビのおかげでみんなけっこう寝不足なのではないか（だから昼寝は不可欠なのだ）、などと思ってしまう。

こんなテレビ産業だから、国営テレビの独占体制が崩れれば民間企業グループも黙っていない。大統領の次男が所有する既存のジャカルタのRCTIやスラバヤのSCTVに加えて、一九九〇年には大統領の長女が代表を務める教育テレビTPIが全国放送で開局した。これ以外にも、インドネシアを含むアジア地域を対象とした香港やオーストラリア系の衛星テレビ放送が始まっており、国内でさらに民間テレビ数局が開局する予定だ。これら民間テレビの開局は、テレビ広告収入の増加を見込んだものともいわれている。インドネシアの国民統合は、発展途上国のなかでいち早く自前の放送衛星を打ち上げ、単一の国営放送を国の隅々にまで流すことで果たされた面があるが、今や様変わりとなっている。

それでも、政府はテレビ放送の内容に目を光らせている。事実、あまりに感傷的な気分させるような歌やポルノチックな歌詞の歌の放送を禁じたり、総選挙の直前にはアクション映画の放送を禁じたり、といった具合である。その一方で、大統領関係の特別番組が何の予告もなしに突然入ったりする。

ところで、レノン・ルンピは、主宰者が一九九二年総選挙で野党インドネシア民主党を公然と応援したためか、同年半ばに放映が終わってしまった。それでも、レノン・ルンピのレギュ

ラー・メンバーの多くはタレントとしてテレビによく出演しており、裕福な若者たちの文化の一つの象徴的地位を確保している。

トゥエンティワン

大笑いのうちに「レノン・ルンピ」が終わると、テレビを視ながらゴロ寝と決め込んだ両親を後目に、大家の長男は私と映画を観に出かける算段を始める。彼の口から出てくるのは米国製の洋画の題名ばかりで、インドネシア映画は「ダサイ」の一言で片づけられ、まるで眼中にない。

大家の長男と一緒に、トゥエンティワン（数字の二十一）系列の映画館へ出かける。トゥエンティワンとは、洋画輸入・配給権を事実上独占している大統領の従兄弟スドゥウイカトモノが総帥を務める新タイプの映画館グループである。彼は「シネプレックス」という概念を唱え、映画館、ショッピングセンター、レストラン、ディスコなどの娯楽施設を統合した一大レジャーセンターをジャカルタの各所に建設してきた。既存の映画館は、配給権を握ったトゥエンティワン・グループに次々と買収され、ジャカルタ市内のロードショー館のほとんどすべてがここ数年のうちにトゥエンティワン系列となった。

系列の新設映画館はもちろん、既存の映画館もトゥエンティワン・グループによる改装の後、駐車場、広いロビー、座り心地バツグンの椅子、ドルビー・サウンドシステム、作りたてのポップコーンなどのスナックを買いこぎきれいな売店などを完備した、全館冷房の新しい映



ジャカルタのトゥエンティワン系列の映画館の一つ。
看板にあるように「レノン・ルンビ」は映画化もされた。

画館としてオープンした。こうしたトゥエンティワン・グループの動きは、現在、ジャカルタからスラバヤなどの地方都市へと広がりつつある。

マラム・ミンダの映画館は、恋人や友人と連れだった若者たちでごった返している。映画館は入替制で立ち見はない。

料金は、映画館の設備により五〜七千ルピア（約二五〇〜三五〇円）と異なるが、他の物価と比べて相対的にかなり高い。

大家の長男が、午後九時の回の分を買いに当日券売り場に並ぶ。ほとんどの映画の売り場は長蛇の列で、上映の一時間以上前に売り切れとなった売り場もあるのに、インドネシア映画の売り場は上映五分前になっても大半の席が埋まっている。ジャカルタの若者たちのインドネシア映画離れは想像以上で、トゥエンティワン系列でインドネシア映画の上映があると、客の入りが悪いため二〜三日で打ち切られるのが普通である。

たしかに、現在ロードショー館で上映されるインドネシア

映画のほとんどは恋愛ものやホラーもののB級映画だ。時々テレビで放映される一九七〇年代の喜劇映画のほうはずっと楽しめるのにか、日本でも上映された「チュック・ニャ・ティン」(政治的理由でジャカルタではわずか三日間のみの上映だったという)のような大作は費用がかかるし、情報省の検閲もきついので作れないのだろうか、とか思ってしまう。映画監督や俳優などインドネシア映画の関係者からは、映画界におけるトゥエンティワン・グループの独占化が現状をさらに悪化させているとの批判が絶えない。

ジャラン・サバン

その後まわった他の映画館も同じ状況で、結局、映画を観るのを諦め、街中をドライブした後、ジャラン・サバン(サバン通り)でサテ(串焼)

を食べることにする。街の中心に位置するその通りには毎晩、もうもうと煙を立てながら鳥肉や山羊肉のサテを焼く屋台がズラッと並ぶ。彼らの多くは東ジャワ州のマドゥラ島の出身者だ。とくに土曜の深夜は若者たちの乗りつけた自動車で通りは真昼並みの渋滞となる。屋台に行つて注文した後、その屋台の前でなく、停めておいた自動車の中でサテをほおばる若者が多い。男の子のグループ、女の子のグループでそれぞれやってきて、サテを食べた後、意気投合してどこかへ遊びに行ってしまう光景もよく見かける。

サテを食べ終えて午後十一時、さてどうしようか。マラム・ミングはまだまだ長い。海岸沿いのアンチョール公園も、都心の独立記念塔公園(モナス)も、ブロックMの屋台街も、そし

て女装の「美女」が多数出現する住宅地メンテンのラトゥハルハリ通り・チマヒ通り周辺など、まだまだそれぞれの賑わいを見せている時間だ。しかし、今回のところは、大家夫妻におみやげのサテを買って帰ることにした。

その後、いつの間にか、土曜の夜になっても大家の長男から遊びの誘いがかからなくなってしまった。奥手の彼も、二人だけのマラム・ミングを楽しむようになったのだ。土曜の夜には、あのジャラン・サバンで、なかよくサテをほおばっているかもしれない。

(まつい かずひさ／アジア経済研究所経済開発分析プロジェクト・チーム)